

2020. 1. 26 第四主日礼拝

使徒 16:25-34 「今、ここで賛美」

聖書

- 25 真夜中ごろ、パウロとシラスは祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた。
- 26 すると突然、大きな地震が起こり、牢獄の土台が揺れ動き、たちまち扉が全部開いて、すべての囚人の鎖が外れてしまった。
- 27 目を覚ました看守は、牢の扉が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。
- 28 パウロは大声で「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」と叫んだ。
- 29 看守は明かりを求めてから、牢の中に駆け込み、震えながらパウロとシラスの前にひれ伏した。
- 30 そして二人を外に連れ出して、「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。
- 31 二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」
- 32 そして、彼と彼の家にいる者全員に、主のことばを語った。
- 33 看守はその夜、時を移さず二人を引き取り、打ち傷を洗った。そして、彼とその家の者全員が、すぐにバプテスマを受けた。
- 34 それから二人を家に案内して、食事のもてなしをし、神を信じたことを全家族とともに心から喜んだ。

はじめに

先週は今年の年間標語の思い巡らしから離れ、教会総会の備えとしてみことばを開きました。今日から再び年間標語に心を向けます。今日を含めてあと4回賛美についての思い巡らしをして終わることにします。今日ご一緒に考えたいことは、賛美をささげる時と場所の問題です。

1. 礼拝の場でささげる賛美

1/5 と 1/12 の 2 回に亘り賛美について学びました。1 回目は、賛美は私たちが神さまへのささげものであり、賛美をお受けになる方は神さまであることを学びました。2 回目は神さまの何に対して賛美をささげるのかということテーマに、賛美は神さまがなされた御業（みわざ）に対してささげられるものであり、特にイエスさまの十字架の救いに対してささげられることを学びました。

今日 3 回目の学びは、その賛美はいつどこでささげることがふさわしいのかを考えてみましょう。賛美をささげる場所として、真っ先に思い浮かぶのは教会ではないでしょうか。教会の礼拝を始め、教会で行われる多くの集会で賛美がささげられます。特に礼拝での賛美の位置づけは重要で、毎週賛美歌を歌うことを通して神さまに感謝し、主をほめたたえています。賛美歌の歌詞に私たちの心を合わせることで、私たちの信仰告白としているのです。今のように教会という場所で賛美がささげられるようになったのはいつからなのだろうかとルーツを探ると、旧約のダビデ王に辿り着きます。ダビデが神さまの臨在を表わす契約の箱をエルサレムに運び入れたとき、レビ人たちを集め楽器をもって神さまをほめたたえるように命じています。これが礼拝における賛美のルーツかと思えます。このことについては次主日 2/2 の礼拝で詳しく学びます。

毎週の礼拝で心から神さまに向かって賛美することで、礼拝の質が高められるのです。ですから、賛美をささげることに遠慮はいりません。心を込めて賛美しましょう。以前、ご近所の方から、「前はもっと賛美歌が聞こえてきたけれど、最近は聞こえてこないですね」と言われたことがありました。私たちは決して遠慮して賛美しているわけではないのですが、ひところ会堂がいっぱいになるほど多くの方が礼拝に集っていた時代がありましたので、ご近所の方はその時代と比べて仰られたのかもしれませんが。地域によっては賛美をささげるとき、ご近所に配慮しなければいけないところがありますが、私たちの教会ではご近所のご理解もあって、心を込めて賛美歌を歌う

ことができます。本当に感謝です。

2. 日常の場でささげる賛美

もう一つ賛美をささげる場所として大切な場所が、私たちの普段の生活の場です。皆さんが教会で過ごす時間は、一週間のうち長くても数時間程度でしょう。一週間 168 時間のうち、礼拝と祈禱会においでになる方でさえ教会で過ごす時間は一週の一割にも満たないと思います。9 割くらいの時間は職場や学校、家庭や地域など教会以外の場所で過ごしておられます。この時間が賛美をささげるのにふさわしい時間となることを求めて行きたいと思うのです。そこで、今朝取り上げた聖書箇所が参考になるのではないのでしょうか。

使徒 16 章はパウロとシラスという二人の伝道者が、ピリピの町で迫害に遭い投獄されてしまった時のことが記されています。イエスさまのことを伝えたところ、町の反対者から訴えられて牢に入れられてしまったのです。「この者たちはユダヤ人で、私たちの町をかき乱し、ローマ人である私たちが、受け入れることも行うことも許されていない風習を宣伝しております。」と訴えられて、衣を剥され、鞭打たれ、木の足かせをはめられて看守の厳重な監視下に置かれてしまったのです。この状況を今日の私たちの日常にそのまま当てはめることには無理があるでしょうが、明らかにパウロとシラスが置かれた場所は教会ではありません。教会の外、いわば日常の中で起こった出来事でした。

このような突然の試練や災いというものは、今日の私たちにも襲いかかることがあります。そんな時に私たちの口から何が出てくるのでしょうか。パウロとシラスが置かれた状況を見れば、恨みや不平不満が出て来てもおかしくないのですが、聖書は次のように記しています。「真夜中ごろ、パウロとシラスは祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた。」(使徒 16:25)。このとき、二人は何度も鞭打たれていますので傷の痛みには耐えていたはずですが、足かせもはめられていましたから自由も奪われていました。そのような中で歌を歌う精神っていったい何なんだろう、どこからその力が来るのだろうかと思ふと不思議に思います。しかし、逆境の中で

こそ表される姿がその人が持っている真の姿であり、強さだと思います。そこには賛美をささげる人の神さまへの信仰姿勢が表れています。ある人たちは問題の中で賛美を歌う余裕があったことに驚き、何事があっても動じない心が欲しいと言うかもしれません。しかし、それを単に気持ちの持ち方や心の強さを学ぶ材料として終わらせるのではなく、なぜ彼らが厳しい環境の中でも賛美をささげることができたのか、その本質的な部分に目を向けることが大切であり、それを私たちも求めたいと思います。パウロとシラスは、困難の中にも共におられるイエスさまを見る信仰の目を持っていました。自分たちを鞭打った者を呪うのではなく、それを祈りに代える力を持っていました。その力はイエスさまから頂いた力でした。

彼らの信仰に裏付けられた賛美の歌声は囚人たちの心を捉えたのです。今、賛美によって獄舎は主イエスさまの臨在の場所となり、パウロとシラスだけではなく、囚人たちにも平安が与えられたのです。そのような意味で賛美は、その人の心の奥深くから出て来るものであり、置かれた場の情景を一変させてしまう力を持っていることが分かります。クリスチャンに与えられている賛美の恵みはこのように大きな力を持っており、周りの人をも平安に導くものなのです。

3. 賛美の結果に驚嘆

厳しい状況の中で賛美がささげられたことで何が起こったのでしょうか。それは賛美による直接的な結果ではないかもしれませんが、賛美がきっかけになって人が救われるという救いの御業が起こりました。

パウロとシラスが賛美をささげていると突然地震が起こり、獄舎の扉が全部開いてしまいました。しかも囚人たちの鎖もみな解けてしまったのです。驚いて目を覚ました看守は、囚人が逃げってしまったと思い、剣を抜いて自害しようとしています。パウロは大声で「自害してはいけません。私たちはみなここにいる」と叫んだのです。誰一人囚人は逃げませんでした。このことに驚いた看守はパウロとシラスの前にひれ伏し「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか」と尋ねたのです。二人は「主イエスを信じなさい。

そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」(16:31)と語り、看守とその家族に主のみことばを宣べ伝えたのです。結果、家族全員がイエスさまを信じ、洗礼を受けました。看守は二人の傷の手当をし、家に招いて食事のもてなしをし、家族みんなで神さまを信じたことを喜んだのです。

賛美をきっかけに一人の、いや家族の救いが実現しました。これは教会の中ではなく、パウロとシラスが生活した場で起こったことであり、私たちの日常の中で起こり得ることです。パウロやシラスほどではないかもしれませんが、私たちだっているいろいろな問題課題の中に置かれ、辛い思いをすることがあります。その中でクリスチャンには神さまを賛美する力が与えられています。その力をいつでもどこでも私たちと共におられる主イエスさまから来るものです。ですから、イエスさまを抜きにして賛美はあり得ません。賛美歌を歌うことはクリスチャンであるなしに関係なく誰でもできますが、信仰の賛美をささげることができるのはクリスチャンだけです。どうぞ、主イエスさまに対する信仰の賛美をささげるお互いでありましょう。その賛美は問題課題の中にいる者たちに必ず平安を与え、どなたかの救いのために用いられるでしょう。

結び

この年、教会の中で、またそれぞれ置かれた場所で主を賛美することに富ませていただきましょう。礼拝での賛美は、神の家族である愛する兄弟姉妹と共に心を合わせてささげるという意味もありますから、礼拝出席の戦いがある中で礼拝を大切にしましょう。そして、礼拝を終えて教会からお帰りになるとき、今度はその場が賛美の場が変わるのです。日常の中で主をほめたたえて一週間は過ごしましょう。主を賛美する一週間となりますようにお祈りします。